様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　６月　５日現在

機関番号：13901
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2009～2011
課題番号：21530684
研究課題名（和文）
学級構造化方略の時系列的変化と児童の多面的動機づけへの影響メカニズム
研究課題名（英文）
Classroom structuring strategies affecting children’s multiple goals
研究代表者
中谷　素之（Nakaya Motoyuki）
名古屋大学・教育発達科学研究科・准教授
研究者番号：60303575

研究成果の概要（和文）：
目　的：これまでの動機づけ研究では、学習に直接かかわる要因、例えば教師による教授方法や、教材の内容、学び方などが、子どもの学習意欲を説明すると考えてきた。一方、実際の教室環境では、子どもは教師―生徒の人間関係や学級風土などの社会的な要因によってさまざまな影響を受けており、社会的環境や文脈の影響を考慮せずに学習意欲について考えることは非現実的であるといえる（e. g. 中谷, 2007; Wentzel, & Wigfield, 2009）
特に教師の学級構造化への方略は、子どものもつ学習および社会的な動機づけに深く影響しているといえる。本研究では、教師による学級構造化方略という新たな観点から、学級において学業･社会を含む多面的動機づけを促すメカニズムについて検討した。学級構造化について、学級の目標構造という観点から概念化した達成目標理論（Elliot & Dweck, 2006）に基づいて、わが国の教室場面に適用可能な尺度の検討および子どもの動機づけへの影響過程を検討した。
方　法：公立中学校１～３年生を対象として、学級の目標構造に関する質問紙を作成、実施した。あわせて、自己価値の随伴性（大谷・中谷, 2010）による尺度、社会的目標（中谷, 2007）を実施した。
結　果：学級の目標構造化の観点から、教室によって、熟達あるいは遂行という学級の目標構造化が異なる傾向が示された。また学級の目標構造は、子どもの学習過程および多面的目標に影響を与えている可能性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：
This study examined the relations of teacher’s classroom management, classroom structure, and children’s academic as well as social goals. Children’s learning activities are affected by social contexts in the classroom（e. g. Brophy, 2004; Wentzel, 2002）. Teacher’s instructional behaviors for managing classroom would have important role for children’s academic and social motivation, because their behaviors could specified the structures in classrooms. However, only few studies have revealed that the important role of teacher’s behaviors in promoting children’s multiple goals (c. f. Ryan, Hicks, & , 1997). Therefore, it is needed to examine what features of teacher’s behaviors promote children’s positive social and academic outcomes(Nakaya, 2007). The purpose of this study was to examine the effects of teacher’s management behaviors on classroom structures and children’s academic and social goals setting. Participants: One hundred sixth graders in three classrooms.
As a result, (1)Classroom Differences in Correlations among teacher’s behavior, classroom structure, and children’s goals were differed by each class. (2) Teacher’s classroom behaviors at the first semester were influenced on structure and multiple goals at the second and third semester The importance of social climate in children’s learning processes were discussed.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
2010 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
総　計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：教育心理学
科研費の分科・細目：心理学・教育心理学
キーワード：多面的目標・学級構造化・児童・教師・自己・教室

１．研究開始当初の背景

教室において，教師は日々児童の学習や生活を支援するために，さまざまな働きかけや指導を行っている。そこでは個々の児童に対する働きかけという側面だけでなく，学級集団全体に対する発話や指導を通じて，教室全体の構造形成を行うという側面が含まれる。このような学級構造形成は，しばしば教育現場では「学級づくり」「学級経営」といった言葉で表現されてきた。学級全体への指導のあり方は，学習風土の構造化や児童の学習態度に影響することで，児童の動機づけの質・量に大きな影響を与える可能性が高い。

さて従来の動機づけ研究において，学級構造の問題に注目したものは教室構造研究（例えば Ames, 1992）などがあるが，それらは内発的動機づけや熟達目標の促進に特化したものであり，それ以外の動機づけや目標について考慮したものではない。児童のもつ動機づけは多面的であり（Ryan & Shim, 2006; Dowson & McInerney, 2003），学習だけでなく対人や自己，社会といった重要な教育的価値との関連についても視野に入れる必要がある。

２．研究の目的

これらのことから本研究では，教師による学級経営への方略が，児童のどのような目標を促しうるかについて，最近注目されている複数の測定方法を組み合わせたミックスド・メソッド（Creswell & Clark, 2007）による検討を行う。複数の教室談話指標（授業観察，教師の発話および教師への半構造化インタビュー）および質問紙測定（教室認知および児童の目標）という質的・量的方法を組み合わせ，実際の教室場面での教師行動から子どもの動機づけへの影響を明らかにする。

３．研究の方法

対象校　大阪府 A 市内の公立小学校 6 年の 3 クラスの児童 100 名および担任教師 3 名。協力校は都市郊外部住宅地に位置する比較的社会・経済的に安定した学校である。担任教師のうち A, C 組は教員歴 30 年以上のベテラン，B 組は教員歴 4 年の若手教諭であった。

ラポール形成　教室観察を行う研究者および研究補助者が，教師および児童との信頼関係を形成し自然な観察を可能にするため，前年度 2 学期始めより 10 数回に渡り授業での学習支援活動を行い関係を形成した。また協力校とは研究目的の十分な説明を行い理解を得た。

対象学年とクラス　校長・教頭・教務主任との学校の現状および課題の状況を踏まえて、比較的若手の教員が多い 2 年と 4 年の各学年を対象とした。

授業観察　教室構造を形成する上で特に重要な年度始め最初の 3 日間（4/9, 10, 11），DV

カメラによる観察が行われ，同時に IC レコーダによる教師の発話録音も行われた。また観察者がフィールドノートを記録した。

教師インタビュー　学年始めの学級集団認知および学級経営信念について，4 月末に 3 名の担任教師への半構造化インタビューを行った。

児童への質問紙　以下の質問紙を 1 学期末に児童にクラス毎に実施した。

1. **多面的目標尺度**：中谷（2006），Patrick, Anderman, & Ryan（2002）などを参考に，学校における児童の多面的目標について，規範，向社会，親密，主張，学業熟達，学業遂行の 6 下位尺度（各 2 項目・計 12 項目）の尺度を構成。5 件法。信頼性は α=.61～.83 と概ね高かったが，親密のみ.29 と極端に低かったため，以後の分析からは除外した。

2. **学級構造認知尺度**：Partick, Ryan, & Kaplan(2007)，Wentzel(2002)などを参考に，1 学期において児童の認知した教師行動について，説得，肯定的期待，親和，意欲，尊重の 5 下位尺度（各 3 ないし 2 項目，計 14 項目）の尺度を構成。5 件法。信頼性は α＝.57～.92。

４．研究成果

(1) 年度始めにおける教師の学級構造化方略

学級会の授業観察を文字起こしし、学級集団認知や学級経営での信念に関する言及や行動に焦点化してカテゴリー化を行った。その結果、３クラスの担任は、それぞれ異なるタイプの学級構造化方略を取っていることが明らかとなった。望ましいクラス像や目標の提示、注意・叱責、期待の伝達など、教師の学級構造化への働きかけは多岐に渡っていることが示唆された。

(2) 教師の学級構造化方略と児童の学級構造認知および多面的目標の関連

次に，各クラスの担任教師の学級構造化方略と質問紙尺度による児童の学級構造認知、多面的目標との関連を検討した。量的分析として、クラス毎に相関および重回帰分析を行った結果、クラスにより学級構造が影響する児童の目標内容に差異が見られることが示唆された。このことから、学年始めの教師の学級構造化方略によって、学期末の児童の学級認知の仕方および多面的目標の内容に影響を及ぼす可能性が明らかにされた。

Table 1　各クラスにおける学級構造認知と多面的目標の関連（相関係数）

A組	規範的目標	向社会的目標	学業熟達目標	学業遂行目標
1 説得	0.20	0.39 *	0.21	0.11
2 肯定的期待	0.38 *	0.36 *	0.01	0.13
3 親和	0.34 *	0.49 **	0.30	0.32
4 意欲	0.26	0.36 *	0.12	0.12
5 尊重	0.38 *	0.50 **	0.29	0.24
C組	規範的目標	向社会的目標	学業熟達目標	学業遂行目標
1 説得	0.34	0.35 *	0.41 *	0.37 *
2 肯定的期待	0.39 *	0.29	0.44 **	0.50 **
3 親和	0.10	0.33 *	0.55 ***	0.32
4 意欲	0.39 *	0.31	0.42 *	0.58 ***
5 尊重	0.25	0.49 **	0.38 *	0.22

(3) 中学生における自己価値と動機づけに関する成果

また、青年期前期である中学生という発達段階では、クラスの要因が生徒の動機づけに影響を及ぼす過程について、クラス要因からの直接的影響だけなく、自己を介して動機づけに至るプロセスが重要な意味をもつ可能性があり（e. g. Crocker, & Park, 2004)、そのような過程に関する実証的検討は見られない。

そこで中学生を対象に、生徒の自己価値の随伴性と内発的動機づけに至る影響を検討した。その結果、中学生における自己を介した内発的動機づけに至る影響が実証的

に示された。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

① 大谷和大、中谷素之　学業における自己価値の随伴性が内発的動機づけ低下に及ぼす影響　パーソナリティ研究、査読有、第 19 巻 3 号、2011、206－216

〔学会発表〕（計６件）

・国際学会

① Kazuhiro Ohtani, Motoyuki, Nakaya, Takamichi Ito, Ryo Okada Relationships among classroom goal structures, academic contingency of self-worth and achievement relevant outcomes. 12th European Congress of Psychology, Istanbul Congress Center, Turkey. 2011. 7. 5.

② Nakaya Motoyuki Relations between classroom structure, children ’ s perceptions to their classrooms, and multiple goals in Japanese elementary classrooms. 27th International Congress of Applied Psychology, Melbourne Convention Center, Australia. 2010. 7. 13.

・国内学会

③ 中谷素之他　動機づけからとらえる授業研究のデザインー教育心理学的アプローチからー　日本教育心理学会第53回総会自主シンポジウム　北海道教育大学、2011年7月26日

④ 中谷素之他　動機づけの教育心理学ーその成果と課題ー　日本教育心理学会第52回総会　研究委員会企画シンポジウム、早稲田大学、2010年8月27日

⑤ 中谷素之他　自己調整学習研究の新たな展開ー動機づけと認知の関連の統合的理解に向けてー　日本教育心理学会第51回総会　自主シンポジウム、静岡大学、2009年9月21日

⑥ 中谷素之　教師の学級構造化方略によって児童の動機づけは変化するか?　日本教育心理学会第51回総会、静岡大学、2009年9月20日

〔図書〕（計３件）

① 中谷素之、他　モチベーションを学ぶ１２の理論　金剛出版　2012、350p

② 中谷素之、他　自己調整学習　理論と実践の新たな展開へ、北大路書房、2012、336p

③ 中谷素之、他　コンピテンス　個人の発達とよりよい社会形成のために、ナカニシヤ出版、2012　267p

６．研究組織

(1)研究代表者

中谷　素之（Nakaya Motoyuki）
名古屋大学・大学院教育発達科学研究科・准教授
研究者番号：60303575

(2)研究分担者

研究分担者なし

(3)連携研究者

渡辺　弥生（Watanabe Yayoi）
法政大学・文学部・教授
研究者番号：00210956

西口 利文（Nishiguchi Toshifumi
中部大学・人文学部・准教授）
研究者番号：70343655